
ネギ、ま？——黄金の獣（笑）が目指す平穩人生譚——

2のぞろ目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギ、ま？——黄金の獣（笑）が目指す平穏人生譚——

【Nコード】

N7193Y

【作者名】

2のぞろ目

【あらすじ】

やったこともない某PCゲームと途中から飽きた某マンガでクロスSSをやってみました（＾Ｏ＾）／
まあタイトルで分かる人も多いかと思いますがどうか生温かい目と三騎士並の強烈な感想をください

歴史とは、些細な事で変わるモノだ。「もしくだったら」「あの時くしたら」「この時くやっていれば」。この物語は2次元好きなのにくして戦場で散った若者の2度目の不可思議な人生である。

『・・・ネギ、ま？——とある黄金の獣（仮）が目指す平穏人生譚——』

始まりは、唐突に訪れた。

「（なんだ、コレ・・・？）」

目を開いて見れば豪華な天井、高級品っぽい毛布・・・そして、碌に動かせない体。

「（俺は・・・確か、戦場に居た筈だ・・・それで、銃で——ッ）あううう・・・？」

自分の口から変な声が漏れた。まるで赤子の様な・・・って！！

「オ、オギヤアアア！！（なんじゃこりやあああ！！！！）」

「オギヤアア！オギヤアア！！」

「ギヤアッ！！！！（って！隣にも居たしッ！！）」

その子に釣られる様に、隣で同じ様に寝かされていた子が泣き喚く。

——何て事が有ったのが十数年前

「はあああッ!!」

「ふッッッ!」

白亜の城壁に囲まれた中庭で、二人の人物がお互いに自身の得意な獲物を持って戦っていた。

「「やあああ!!」」

彼らは今、目にも止まらぬ速さで動き、武器を振るっていた。彼らは別に武術の達人と言う訳でもなく、はたまた改造人間と言う訳でもない。なら何故高速で動いているかと言うと——魔法だ。

此処は魔法世界《ムンドウス・マギクス》と呼ばれる世界。その小国ウエスペルタティアの王都オスティアの城の中である。

「ふッ!はあああ!!」

片や金色の長い髪を靡かせ、細剣を振るう少女。

「——ふッ!!」

片や少女と同じ金色の長髪を背の辺りで縛り、長槍を振り回す青年。

「.....」

「.....よし、此処までにしようか」

その言葉を合図に、少女は地べたに座り込み。少年は近くのベンチに置いてある魔法瓶を取って来る。

「全く、兄様の槍の扱いには驚かされる」

「そうか? 私としてもアリカの剣戟の鋭さには驚嘆する・・・最後は本気で殺そうと思ってたろ?」

「.....(ファイ)」

図星だったのか少女——アリカ・アナルキア・エンテオフュシアが顔を背ける。その行為が青年——ラインハルト・トリスタン・オイゲン・エンテオフュシアの頬を緩ませる。

「フッ、一休みにお茶など如何かな? 我が君 姫?」

「.....頂く」

機嫌が悪くなった時は何時も自前の紅茶を振る舞い、ご機嫌を取

るのがお約束だった。美味しく入れられた紅茶を飲むその横顔は、何時もは魍魎跋扈する政治家達の相手をする妹の鉄面皮が剥がれ、年相応の顔を見せる。

「兄様の入れる紅茶は・・・温かいな」

「何時かアリカの手料理も食べてみたいものだ」

その一言で顔を赤くさせ、何とか話を逸らそうとする愛おしい妹の姿を見れば。自分も安らげる事が幸せだった。

――それが数年前の出来事。

「――――夢、か・・・（何時以来だ？優しく、温かい夢を見れたのは）」

服は擦り切れボロ布なり、体は傷だらけ、黄金の蠶の様な長髪も見る影も無かった・・・だが、その身に存在する存在感だけは色あせていなかった。

「（アリカをナギに預けて正解だったな。こんな薄汚い場所は彼女には似合わない）」

彼女の事だ、恐らくは自分の事を気にかけて自身の幸せの事を考えていないだろう。

「（だが、それも明日で終わる）」

明日には自分の処刑が決行される。恐らくは誰も助けには来ないだろう。臣下も、家族も、盟友も切り捨てた。自国の民も他国の民も、腐った爺共の情報操作で自分の事を憎み、恨んでいる事だろう――何よりも。

「（元より、生きる気はない。私が生き続ければ、アリカはずっと私を救いだす方法を探し続けるだろう。私が死ねば彼女は悲しむ事だろう）」

だがそれは時が立てば自ずと癒える。何よりも彼女が惚れた男が傍に居るのだ……唯一つ、此処残りが有るとすれば。

「（――アスナ）」

二人目の妹。例え生まれた時が違くとも。例え異母の腹から出て来たとしても。

彼女の、二人目の妹のこれからを見る事が出来ないのは残念だと思ふ。だからこそ、子の言葉を贈りたい。

「（ 汝 の 生 に 幸 あ れ ）」

Ich bin Gluck der fur Leben
von das Sie

――数時間後、彼はケルベラス溪谷へと落ちて逝った。

『――では、次なる喜劇の幕開けと往こうか』

———????

穏やかな風が肌を撫でる。暖かな日の光が瞼を閉じていても差し込んでくる。

「（・・・・・・まで、風だと？）」

驚きと共に目を開ける・・・・視界に入るのは見知らぬ森の中だった。

目に入るのは獣の群れと尖った牙の剣軍ではなく、木々の葉の隙間から差し込む日の光。風に運ばれてくるのは血臭と獣の臭いではなく、木と土と草花の匂い。聞こえて来るのは獣の咆哮と唸り声ではなく、葉が擦れる音——コレを一言で表すなら。

「生きて、るのか・・・・？」

近くに異様な気配を感じ、視線を向ければ。

ロングス・テストメント

「聖約・運命の神槍・・・・何処までも私に付いて来る気か」

手を伸ばそうとして。ふと、自身の視線に違和感を感じ・・・・更なる驚愕が襲いかかる。

「な、なんじやこりやああああああああ！！！！」

己の獲物を取ろうとした手は・・・・人の手では無い己の手だった。

———関節は存在するが、丸っこい手

———手の平は触ればプニプニしてそうな柔らかい肉

———意識すれば伸びる爪

———極めつけは金色の毛並み

それはまさしく猫だった。そして辿り着く一つの答え。

「これは———未知だ：ッ！」

今、黄金の獣殿^{ネコ}が未知の結末をの先を歩み始め———

「まずは食い物だな。その後は住処だな！は、ははははは！良いぞ！気分が良い！今、正に（政治と政務と王族の責務的なモノと老人共の娯楽から）解放されたッ！！」
———とは思えない。

うん。続く筈無いんだ。ノリと勢いで書いてみただけなんだ。決して今書いてる小説が行き詰った訳では無いのだよ？ホントダヨ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7193y/>

ネギ、ま？――黄金の獣（笑）が目指す平穏人生譚――

2011年11月21日16時19分発行